

第5回新鋭俳句賞

正賞

「落葉松霧氷」三十句

伊藤幹哲

落葉松霧氷

みづうみに雪降りそむる初湯かな

立春や杉の根方に射すひかり

明け方の鳥啼きのぼる班雪山

立子忌の夜空滴るごとくなり

船笛の島を離るる春休

紺青に昏るる沖あり初燕

花散るや己がひかりを追ふやうに

花檜のにはふ真闇となりけり

マロニエの葉かげ踏みゆく立夏かな

花桐や黎明に聳つ双耳峰

てんと虫子の掌に微熱あり

上潮の打つ石垣や花梯梧

沖雲の波立つ夜なり蚊遣香

虚空より碧きみづうみ罌粟咲けり

太々と黒々と干す昆布かな

溪底に瀬音激ちぬ朴の花

笹舟の流るる夏至の片明り

揚舟に日の照り返す立葵

水打つて人待つ心定まれり

白雲に白雲触るる山開

溜息のごとく風来てアマリリス

水澄むや枝さしかはす棗の樹

遠嶺より風立つ鷹の渡りかな

火口湖を夜雲おほひぬ十三夜

峡空に白き山聳つ枯芙蓉

マフラーに朝日の匂ひふくらみぬ

月明の山頂に雪炎立つなり

暁闇の鶴唳胸に降りにけり

凍滝の中ひびきあふ水音あり

銀環を背負ふ落葉松霧氷かな